

「EM フォーラム in 名桜」開催記録
主催：名桜大学、共催：EM 研究機構

1. フォーラム概要

- ◆ 日時 3月1日(日)、14:00～17:30、(交流会 18:00～19:30、参加者 31名)
- ◆ 場所 名桜大学講義棟 110 教室
- ◆ 参加者 100名(名簿記帳)
- ◆ 会次第 ①主催者あいさつ 名桜大学・瀬名波榮喜学長
②事例発表(3例、詳細以下)
③比嘉照夫教授総括講演
④交流会

2. 事例発表

<発表その1> 「饒平名区 EM と暮らそう会」 会長 大城豊茂さん



【EM 導入の経緯】

EM の開発者「比嘉照夫教授」は名護市饒平名の出身。比嘉教授が名桜大学に赴任したのをきっかけに、同地区の老人会が中心となり、EM を生活に取り入れていこうという機運が高まる。のちに2007年、「饒平名区 EM と暮らそう会」を結成。毎月2トンの EM 活性液を作成し、地域社会へ EM 活用の実践を呼びかけている。

【発表内容】

「饒平名区 EM と暮らそう会」は、同区公民館で毎月2tの EM 活性液を共同で仕込み、20人の会員へ EM の供給、その他地域住民への無償提供や活用方法の指導を行っている。

過疎化、高齢化が進む同地区では、住民間協力による高齢者のケアが欠かせない状況にあるが、大城さんは、自ら入浴や洗顔、清掃などに EM を活用し、その効果を実感した上で、高齢者の生活・衛生環境の改善に EM の活用を勧め、周囲から喜ばれている。

また、学校や郵便局をはじめとする公共施設に EM 活性液を無償提供、清掃・臭気抑制への EM 活用が地域に根付きつつある。大城さんは「排水溝から EM を流すことで、将来的に浜辺や羽地内海がキレイになれば」と期待し、「活性液を自分たちの手で作り、歩いて地域に配ることで、われわれ自身の健康管理にもつながる」と語った。

昨年の11月からは EM を使った有機栽培も始めた。日常生活や健康管理、趣味の園芸などを通じて EM と楽しく暮らす姿があった。



活性液を製造・配布している区の施設



活性液の配布状況

<発表その2> 「みやぎ農園」技術顧問 宮城盛彦さん(「株みやぎ農園」代表取締役)



【所在地】 沖縄県南城市大里

【事業内容】 産卵鶏飼育、特別栽培農産物流通

【EM活用状況】 別紙添付

【発表内容】

養鶏を始めた当初、抗生物質や消毒剤などを使用する一般的な飼育管理を8年間続けたが、最高の餌と薬剤を使っていたにも関わらず、毎日多くの鶏が死んでいく様子を見て近代養鶏技術に疑問を感じるようになる。ある時、病気に感染した鶏を処分するには忍ばず鶏舎の外に放置したところ、土や雑草を食べて自然治癒していく姿を目の当たりにし、鶏が本来持っている能力を引き出す自然養鶏を考えるようになった。より良い環境と飼育方法を追求する中、微生物の利用に着目し、最終的にEMに辿りつく。

その後、EMの性質に即した平飼い養鶏を試行錯誤する中、鶏糞のかき出しを止め舎内にそのまま堆積させるという、常識では考えられない飼育方法を確立させることができた。鶏糞を鶏舎に放置すると普通なら病気のリスクが高まる場所だが、EMを活用して育てられた鶏の排泄物は、舎内の環境を汚染するどころかむしろ浄化している。

人間の考えや常識で、鶏や微生物の可能性を制約してはいけない。余計なことは極力しない。人ができることは、鶏が育つお手伝いだけ、と言い切る。

自然養鶏をはじめた当初、500羽だった飼育羽数も今では8000羽に増え、大手スーパーからの引き合いもあり、供給が追いつかないほど好評を得ている。もちろん薬剤は、16年間一度も使

用していない。

一方 2004 年には、特別栽培農産物栽培履歴確認者の資格を取得。地方に活力を取り戻すには一次産業を活性化させるしかない、という思いから、地元野菜の商流を開始。タマゴ流通で得られた販売網やノウハウを活かし、安心・安全な地元野菜を消費者へ届ける橋渡しを担うようになった。現在、50 戸の生産者と提携、32 品目を取り扱っており、今後も EM 研究機構の技術指導を仰ぎつつ、提携生産者の数を増やしていきたい、と発表を閉めた。

<発表その3> 「EM 研究機構地域振興部」研究員 大城盛朝

沖縄県北部地域での EM 活用状況を簡潔に報告。報告内容、大きく以下4点。

- ① 宜野座村では、スイカ栽培への EM 活用が始まっており、糖度が高く瑞々しいスイカを生産している。「EM スイカ」として好評。
- ② 「饒平名区 EM と暮らそう会」農業班では、パパイヤ栽培に EM を活用。付近の農場がウィルス病で壊滅的な被害を受けたにも関わらず、EM を活用した圃場では被害がほとんど見られなかった。EM セラミックスパウダー塗布による効果と考えられる。
- ③ 本部町や名護市では、柑橘生産者からの技術指導要請が増えてきている。EM 活性液の原液を土壌灌注、同希釈液の葉面散布を行うことで減農薬栽培に取り組む。
- ④ 「琉美豚」、「やんばる島豚」のブランドで有名な我那覇畜産では、飲水添加、飼料添加、舎内散布といった基本に忠実な EM 活用を続けると共に、新設した豚舎の建築にも EM を活用。良質の肉を生産している。



宜野座村のスイカ栽培



パパイヤへのセラミック塗布状況



柑橘栽培への EM 活用



我那覇畜産の「やんばる島豚」

2. 比嘉教授総括講演(要約)

- ① EM は生き物
- ② 生き物を育てるには、相手の気持ちを理解する心が必要
- ③ EM も同様で、その扱いが上手になるには「EM 語 (EM との会話)」が上手になること
- ④ 今回の事例発表いただいたお二人ともに、目に見えない生物との会話を実践しており、ひいては納得のいく結果を得ることが出来ている
- ⑤ 人体共生菌の観点に立てば、「人間は微生物によって支配されている」と言える
- ⑥ どのような微生物と付き合い我々の身体と共生させていくかが、生活の質を向上させる鍵

3. 交流会

【時 間】 17:30～19:30

【場 所】 名桜大学学生食堂

【参加人数】 31 人

「ホテルコスタビスタ沖縄」から EM 食材を用いた料理の協賛などがあり、比嘉教授、発表者らと地元 EM 活用実践者との親睦、交流を深めた。